エンタ目

仙頭 武則

■『藍色夏恋』に救われた

見てない映画は全て新作

『藍色夏恋』という台湾映画のお話。二〇〇二年、カンヌ国際映画祭の監督週間に招待され、その後は多くの国際映画祭で紹介され、称賛を浴びた青春映画だ。便利な時代になったものでデジタルリマスター版を配信で見ることができる。親友の死や止めることができない「戦争」に憂鬱な気分が続き、毎日欠かさず見ていた映画を見る気力さえなくなりつつあるこの二カ月、それでもできるだけ陰鬱な気分から遠く離れられるような作品を選択してつかの間、現実逃避を試みている。

『藍色夏恋』に救われた、とまずは言っておこう。「見ていない映画は全て新作」という名言があるが製作年度の新旧は意味を成さない。リマスターされた画質ならなおさらだ。ショットのみずみずしさに目を奪われる。主人公二人が動き、周囲の生徒は微動だにしない場面、過剰な演出とも言える大胆な手法が些細な二人の感情表現の演技を強調することに成功している。セリフも簡潔で少ない、画面を凝視せよ、と強く主張する、そして何より自転車だ。

乗り物をうまく撮っている映画はそれだけで傑作といってよいのだが『藍色夏恋』も例外ではない。主要な登場人物三人のうち、ひとりは自転車に乗っていないことも秀逸で、故に二人の自転車のショットの美しさが際立つ。自転車に乗りながら交わされる視線のやりとりは、この映画の醍醐味と言える。

筆者の所蔵DVDの中に…『藍色夏恋』を発見

巻末「未来の自分は想像できないけれど、あなたの姿は想像できる」のモノローグの瞬間には感涙。二十年前に台湾ではすでに今日的なテーマがかくも美しく切なく扱われていたのかと感心する。

感激冷めやらぬ翌日、膨大な所蔵DVDの中に『藍色夏恋』を発見して落胆、年は取りたくないものだ、いやこの年になったからこそ感激の度合いが増したのだ、と強がってみよう。（名古屋学芸大教授、映画プロデューサー＝次回掲載は六月三十日）